

鳥居素川

漱石君を悼む

漱石君を悼む

嗚呼あ夏目君を失った。自分は夏目君を東大より我社に奪った兎頭人として感慨殊とに深いのである。夏目君の文学の大家であることは疾とく何人なんびとも知って居たろうが、自分は知らなかった。『我輩は猫である』という本の頻しきりに持もて囃はやさるる時分、自分は見向きもしなかった。或日、社の林寛君が『我輩は猫である』の一冊を投げつけて、一度読んで戴きたいと言って去った。一度読んで見た、感心もしない。二度読んで見た、感心もしない。何だか

下らない事を勝手に書いてあると思ひ、この世の中に今少し有益な事を書いてある本を読まねば、一生に時間は足りない、青年輩が斯かかる本に没頭するは困ると、聊いささかかの反抗心も持っていた。殊に自分は小説嫌いである。読まず嫌いである。小説なるものは男女の關係を書いたもので、士君子の手にすべきでない。書く者の人物は勿論、之これを読む者も卑むべしという独断から、所謂いわゆる小説というものを読まなかつた。所が日常の勤務に疲れた頭を医いすべく、春の暮れ方の何時なんどきであつたか、夏目君の著作を今一度読んで見ようと、今度は『鶉籠うずらかご』というを袖にし、

阪神線の芦屋の麦畑の畔ほとりの小川の浚ふかく流るる所に、蝙蝠こうもりに顔を蔽い、董花、蓮華草れんげそうを枕にして、心静かに『鶉籠』を讀んで見た。ハテナ、唯の小説ではない。殊に篇中の『草枕』に逢著し、ハテナ、我等の論ずる所を君は小説で書いている、偉い、唯の人物ではない。仰げば蒼天、俯せば草枕、自分はこの時を以て君の筆に融合して仕舞った。その翌、忘れもせぬ我社の旧建物の中の真しんきゆう葦館かんと称えられし総務局に於て、我が讀みし『鶉籠』を村山社長に見しめし、一度この書の幾分を讀んで戴きたいと願った。是れが君の我社に入りし端緒である。

自分は社長の命に依り、東朝の池辺三山君いけべさんざんに申送った。三山君よりは迎むかても六ヶむっかしかろうとの返事が来た。併し石田三成が島左近しまさこんを抱えた例もある。況いわんや我社をやで、交渉を託すると、意外にも反響がある。稍話ややの進行中、自分は不図復考またえた。彼かの草枕の中に肺病患者の心理状態を余り委しく書いてある。夏目君も自然は肺病患者ではあるまいか、病人を抱え込んでも仕末に終えぬ、殊に推薦者に責任ありと、自分は早速燈下に筆を執り、交渉を今少し緩慢にして戴きたいと三山君宛の書面を書きかけた。併し半ばに至り、急に筆を投じ、縦よし肺病患者に

せよ、斯かくばかりの人を見棄つるは不可なり、肺患ならば何いざ

 れ薄倖の人なるべし、斯この人を不遇に終らすのは社会の

 罪なり、我社政一層君を迎うべしと、乃すなわち話を進め、

 君はその親友たる当時の京大文科学長狩野亨吉氏の下鴨しもがも

 の邸に來られた。自分が君に對面したのはこの時が初め

 である。君は閑雅な、飄逸ひょういつな、寧ろ、俳人めいた人で

 あつた。併し、話の中に一徹な氣格があつて、高風の掬きく

 すべきものがある。成程、この人が、草枕の中に現われ

 ていたなと思つた。陰森いんしんたる糺ただすの森の小影に白昼肩を

 鎖し、百姓の老夫婦を一家の主宰者とし、自らは禪僧の

掛錫かいしやくにも似る生活を営んでいた狩野博士の親友として相応ふさわしかつた。自分の勧めに依り、君は大阪に来て、社長に面会せられた。『京に着ける夕』という瑰麗かいらいの奇文が君の名を以て我紙に現われたのは、君が社長に面会せられた後、僅かの日であつた。

人は妙なもので、互に相感ずるものあれば、亦また相応ずるものである。爾来じらい、君と自分とは唯の交友ではないようであつた。君の小説に洗礼を受けて以来、自分も小説というものを読むようになった。併し君の小説の外には、マダ他を愛読するの余裕を持たない。詰り哲学として君

の小説を読み、又人にも勧むるのである。されば例として君の著書の出版さるる者の第一本は必ず余の机上に置かるるのである。君は江戸ツ子のキビキビした、而も高しか雅隠逸な人で、容易に人に許さなかつたが、池辺三山君には矢張り推服された一人であつた。三山君既に去り、君亦去る。更に更に憶うのは、二葉亭四迷君が露都に行く前、君と四迷君と自分と東京神田川に鱈魚せんぎよを喰つたことがある。君と四迷君は盛んに文学を談ぜられたが、文学に門外漢たる自分は唯箸を放さなかつた。四迷君と君と今は則ち亡し。而して残るものは碌々たる自分一人で

ある、
嗟。ああ

〔『大阪朝日新聞』 大正五年十二月十一日〕

日本文学電子図書館

漱石君を悼む

著 者：鳥居素川

制作者：宮澤一郎

底 本：「漱石追想」

岩波文庫、岩波書店

2016年3月25日 第1刷発行

日本文学電子図書館